学びや タイムスリップ

㊳ 特大の掛け軸 （明治時代～）

大教室用に特別あつらえ

京都市内の学校には、長い歴史の中で寄贈された美術作品が多く残されていますが、その中に、非常に大きな掛け軸や屏風が見られます。

明治・大正期の京都の学校は和風建築が主流であったため、その校舎を豪華に飾る目的で地元の画家や所蔵家が贈り、床の間を備えた教室などに置かれていました。一般の家庭で飾るには大きすぎるサイズの掛け軸などは、学校の大教室のために特別にあつらえられたものだと分かります。

中京区の立誠小（現在は高倉小に統合）に所蔵されていた「公助受父笞図（きんすけちちのむちをうくるのず）」（写真1）もその一つで、表具まで入れると、縦257チセン、横190チセンを数える特大の掛け軸です。自彊室、または修身作法室と呼ばれた礼儀作法などを学ぶための教室に掛けられていました（写真2）。明治から大正にかけて活躍し、歴史画をよく描いた画家、谷口香嶠（こうきょう）の作品です。

画題は今昔物語集に収載される説話の一場面。平安時代の官吏で、弓の名手として知られた下毛野公助（しもつけのきんすけ）はある日、賭弓（のりゆみ）という騎射の腕を競う宮中行事において的を外し負けてしまいます。それに怒った父親が公助をむちで打ちましたが、公助は少しも動かずじっと耐えていました。

後でそれを見ていた人が、「どうして逃げずに打たれたのか」と問うと、「父は老齢の身ですから、私が逃げて、父がそれを追って転ぶといけないので」と答えたといいます。作品に描かれているのは父親がむちを振り上げる場面で、緊迫感が画面を包んでいます。

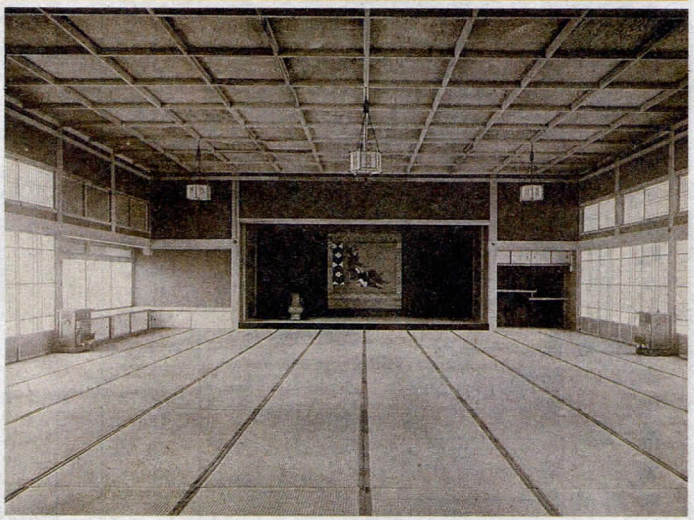
こうした孝行譚（たん）は明治の修身教育において取り上げられ、教科書などに掲載されていました。

作品の大きさや教育に関わる画題は、学校所蔵の美術品の特徴といえます。

（京都市学校歴史博物館 学芸員 森光彦）

◇

今回紹介した「公助受父笞図」は7月2日から、学校歴史博物館（下京区）で複製パネルを展示します。



㊤写真1、谷口香嶠「公助受父笞図」（明治期、元立誠小蔵）㊦写真2、立誠校の自彊室（修身作法室）＝1928年撮影